

「正信偈」について（第五回）

正信偈の教え上 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による
ほんがんみようごうしょうじようごう

本願名号正定業

本願の名号は正定の業なり。

ししん しんぎようがんにいん

至心信楽願為因

至心信楽の願を因とす。

じようとうがくしょうだいいねはん

成等覚証大涅槃

等覚を成り大涅槃を証するこ
とは、

ひっしめつど がんじようじゅ

必至滅度願成就

必至滅度の願成就なり。

〔意訳〕

本願の名号は正しく往生を決定するはたらきをする。（第十七願）
第十八の至心信楽の願が往生の原因となる。

仏となって、大涅槃のさとりに至ることは、第十一の必至滅度の
願の成就による。

阿弥陀仏は、仏に成られる前、法蔵という名の菩薩であられ、法蔵菩薩は仏に成って一切の人々を救いたいという、格別の願いを発された。
それは、深く悩み苦しみなから生きなければならぬ私たちを救おう
とされた願いなのです。それは、目先の出来事に心を奪われて、苦悩
している自分の事実すら見失っている、たずかるはずのない凡夫であ
る私たちを何とかして救いたいという本願なのです。

「本願の名号」というのは、「南無阿弥陀仏」のことです。法蔵菩薩
は、どのような人も全て救いたいと願われました。もし、全ての人々
を救うことができないのであれば、自分は仏には成らないと誓われそ
して、法蔵菩薩のこの誓願は成就したのです。つまり、「南無阿弥陀

仏」という本願の名号を私たちに与えることによって、私たちが苦悩から救いとられて、間違いなく浄土へ往生することが明確になったのです。それで法蔵菩薩は阿弥陀仏に成られたわけです。そして、本願の名号は私たちが生きて往く^ゆ方向を正しく定める仕事をしています。というのは、法蔵菩薩の第十八の願すなわち、全ての人が、法蔵の建立しようとする浄土に生まれることを信じて求め(欲生)、心を尽くして(至心)、そこに生まれることを信じて願い(信樂)、そのことを念じたとして、もしも、その人が往生できないのであれば、自分は仏には成らないと誓い、結果阿弥陀仏に成られたからなのです。「等覺」というのは、「無上正等正覺」という言葉を短くしたもので、「無上」その上が無く最高で、「正等」いつでもどこでも等しく普遍であり、「正覺」は仏の完全な覺りのことです。

「大涅槃」の「涅槃」は、もともとは苦悩の原因である煩惱をすべて滅して、迷いから解放された状態を指す言葉です。親鸞聖人の教えでは、「涅槃」は私どもが、阿弥陀仏の本願によって遂げさせていただく「往生」を指しているのです。

私たちが、仏に成って、往生という大涅槃に至るのは、それは、阿弥陀仏が、まだ法蔵菩薩であられた時に発^{おこ}された本願のうちの、「必至滅度の願」といわれる第十一番目の願が成就したからです。

「滅度」は「涅槃」のことですから、「必ず滅度に至る」ための願いというのは、「必ず涅槃に至る」願いということです。結局それは「必ず浄土に往生させる」という願いという事になるのです。

阿弥陀仏の本願によって、私たちに差し向けられている名号、つまり「南無阿弥陀仏」こそが、私たちの往生をまさしく確定するはたらしきをもつのです。それには第十八の「至心信樂の願」が成就していることが直接の原因となっているのです。そして、私たちが往生するということでは仏になるのは第十一の「必至滅度の願」が成就しているからなのです。